

要旨(日本語)

ヴィシー政権時代におけるオペラ・コミック座:
フランス人作曲家による新作の検証と考察を通して
田崎直美

本研究は、ヴィシー政権時代(1940-1944年)のパリ・オペラ・コミック座における音楽活動について、そこで初演されたフランス人作曲家による「新作 l'oeuvre nouvelle」の特徴およびその上演状況を中心に検証と考察を行う。検証に際しては次の三つの視点、1) 新作に対する運営側の方針、2) 新作の上演状況、3) 新作の梗概及び音楽的特徴、について調査を行った。そしてヴィシー政権前のオペラ・コミック座運営組織であった「諮問委員会 Comite consultatif」の時期(1936-1938)との比較を通しながら、ヴィシー政権時代新たに行われたオペラ・コミック座における文化政策の反映および創作活動状況の変化を考察した。

その結果、一見すると 1936-40年時とほぼ同じ音楽活動を継続していたヴィシー政権時代のオペラ・コミック座でありながら、新作をめぐる運営側の態度および活動内容の詳細部分には、変化あるいは変質が生じていたことが判明した。運営側の態度に関しては、新作を作曲するフランス人作曲家を優遇する文部省の政令、そして再演促進による新作およびそのフランス人作曲家の保護、が注目に値する。また作品内容からは、1942年初演の新作群において、フランスの「民間伝承 le folklore」の要素が盛り込まれるという形で国民革命の理念の反映が見出された点も注目される。この点より、新作の製作や上演決定の過程には当時の政治情勢が反映しており、1942年の新作上演は「フランスのアイデンティティ再確立」いうイデオロギーのプロパガンダとしての役割を果たしていたこと、が考えられるのである。以上の特徴より、ドイツ占領下でありながら自国民とその芸術の繁栄および活性化に努める策定者、そして自発的であれ結果的にであれ国家のイデオロギーを新作に反映させた作曲家の存在が浮き彫りになったといえよう。